

No.3114

ホーンダミール編『名高き書簡 Nama-yi Nami』(1519 年完成)の研究  
—工匠の社会的地位と韻文リテラシーの問題を中心に—

日本学術振興会特別研究員 PD (東京外国語大学)

神田 惟

本研究の目的は、工匠 artisan や工匠の営為に係わる記述を有する同時代一次史料(ペルシア語およびアラビア語) および詩芸に習熟した工匠の関与が明らかな美術工芸品の集成の作成と分析によって、「ティムール・ルネサンス」の時代として名高い、君主フサイン・バーイカラー(在位 1469-1506 年)の治世以降のイランにおける工匠の韻文リテラシーの程度について、実証することである。具体的には、ホーンダミール編纂のペルシア語書簡文例集『名高き書簡 Nāma-yi Nāmi』(1519 年完成)の写本のうち、イラン・イスラーム共和国のテヘラン及びマシュハドの図書館に現存する、16 世紀から 17 世紀にかけての間に筆写された写本群の調査を行う予定であった。

しかしながら、2019 年末に始まる世界規模での新型コロナウイルス感染症の流行により、本研究プロジェクトの核となるイランでのフィールドワークについては断念せざるを得ない状況となった。また、2021 年 4 月 1 日付けで科学研究費を取得したことに伴い、本研究助成の受給資格を喪失したため、同日付けで本研究は中止することとなった。

国内を拠点に行われた本研究の成果は、研究代表者の博士論文の Chapter One、Chapter Three、及び Appendices に反映された。特に、Chapter One では、英仏の文書館所蔵の『名高き書簡』写本の分析により、工匠にとって、ペルシア語詩の素養が、潜在的な顧客と円滑にコミュニケーションをとるために必要な作法であったことを明らかにした。Chapter Three は、15 世紀末-17 世紀末に制作されたペルシア語の詩芸に習熟した人物の関与が想定される工芸品の中でも、特に、素材としては真鍮、器種としては燭台に焦点を当てた章である。本調査研究助成を利用して購入した書籍の中には、国内では入手困難なオークションカタログや、展覧カタログ、図録を多く含む。これらの書籍の網羅的な精査により、当該タイプの美術工芸品の制作地をイラン中部の都市カーシャーンであるとする研究代表者の主張を裏づけることが可能になった。